

# 『オハイオ州ワインズバーグ』を読む(2)

## ——「手」、「紙礫」について——

新堀 孝

この小論文は、『日本英語英文学』(No.14. 2004)に発表した、「『オハイオ州ワインズバーグ』を読む(1)」の続稿である。今回からは、前回に扱った「神性」(4部構成の物語)を除いた章を順序通りに読むことにしたい。紙面や時間の制限もあり、各章の考察すべてを終えるのに、どのくらい時間がかかり、いつ作品を総括する考察を終えられるかわからないが、前回も書いたように作品全体を総括する前に、各章を精読し、シャーウッド・アンダーソン(Sherwood Anderson: 1876-1941)が「美味しい」(‘delicious’)(14<sup>1)</sup>)という「甘さ」(‘sweetness’)(14)をうちに秘めた「ごつごつとして、歪なリンゴ」(‘the gnarled, twisted apples’)(14)と呼ぶグロテスクな人々を十分に味わい、彼らについて考え、彼らとわずかばかりの関係を持つことのできる唯一の人物、ジョージ・ウィラード(George Willard)がなぜ、彼らに近づくことを許されるのか<sup>2)</sup>、そして、何故結局はワインズバーグを出て行くのか、彼の旅立ちが何を意味するのか、などの問題を考察したいと思う。

### 1. 「手」

この作品全体の序章にあたる「グロテスクなものについての書」(“The Book of the Grotesque”)につづく、実質、この作品の第一章にあたる、この作品「手」(“Hands”)は象徴的な書き出しで始まる。「半ば朽ちかけたヴェランダを」、「オハイオ州ワインズバーグという名の町の近くにある溪谷の縁に建っている木造の小さな家の」、「一人の太った、背の低い男が神経質そうに行ったり来たりして歩いていた」(9) (上点は筆者によ

るもの)。<sup>3)</sup>「半ば朽ちかけた」と「小さな」は、この男の暮らしぶりが決して豊かではないことを暗示するし、「半ば朽ちかけた」と「太った」は、彼があまり活動的な人間ではないことを暗示する。また、「溪谷の縁に建っている」と「神経質そうに」は、彼が追いつめられて不安な、何か満たされない精神状態で生活を送り、決して町の間人達と十分な人間関係を築いてはないのだろうということを暗示する。読者は、これだけでも十分にこの物語の主人公にネガティブな印象を抱くだろうが、暗示的な描写はさらに続く。彼の住んでいる家と公道の間には細長い畑があって、「そこにはクローヴァーの種がまかれたのだが、黄色い野原ガラシがびっしり生えただけであった」(9)とある。辞書によれば、クローヴァーは「豊穡」の象徴<sup>4)</sup>とあり、また「春、新生、復讐」の象徴<sup>5)</sup>ともある。この物語の主人公は、人としての暮らしを諦めながらも——訳あってこの地に移り住むことになったが、その移動の途中で、この地で名乗る自分の名前をビドルボーム(Biddlebaum)と「貨物駅で見かけた商品の箱の字から自分で付けた」(上点は筆者による)(13)——心のどこかで新しい生活のやり直しを望んでいたのだろう。だが、実際に生えたのはびっしりと生い茂る「黄色い野原ガラシ」だった。カラシも豊穡を意味するが、その他に「忍耐」の象徴<sup>6)</sup>でもある。しかもその色は黄色——黄色は良い意味でも用いられるが、ここでは「臆病、死、崩壊」<sup>7)</sup>の象徴と理解するべきであろう。この主人公ビドルボームの、この地での生活は、堪え忍び、他人を恐れてうちにこもり、周囲の人間との関係は崩壊している。だが、その生活は、彼が新しい自分の名前を商品名からとったものに変えたとき、彼に定められた運命のようなものになったと言えよう。彼は、自ら人間としての暮らしを捨てたのだから。

彼の家の前の細長い畑の向こうには「公道が見えた」(9)。この公道は、ビドルボームが一人で人として外に出ることのできる限界になっていて、彼と社会を隔てる境界線のようなものでもあるようだ。確かに、彼は、苺つみの仕事をしに、苺畑へ行くことはあったし、むしろ彼は「彼の手で、一日に140クオートもの苺を摘み、それが彼の際立った特徴となり、彼の名声のもとになっていた」(10)。しかし、それは彼が「人」として人々の注目を浴びたわけではなく、「銀行家の石造りの新しい屋敷や栗毛の種馬をワーンズバーグの人々が誇りに思ったのと同じ気持ち」(10)からで

あって、いわば彼は能率の良い苺積み取り機のようなものと認識されているに過ぎない。

書き出しに戻ると、この公道を「畑から戻る苺つみの者たちを載せた荷車が進んで行くのが見え」、「その若い複数の男女は大声で笑い声をたてて大騒ぎしていた」(9)。Howeは、こうしたこの町を構成する多くの人間を「町の公的な暮らしを支配している、つまらない('banal')連中」、「ほんくらども('clods')」(115)<sup>8)</sup>と呼んでいるが、語り手は何故か、これらの若者の一人のシャツを「青」(9)と明確に色を示している。青は「(若さの特徴である)率直さ、深みの欠如、皮相」などを表し<sup>9)</sup>、グロテスクな人間達と町の一般人との違いを際立たせているようである。それと同時に、興味深いことに、青は「心を和らげる色、男性と同性愛の色」<sup>10)</sup>という、この文脈に関係ありそうな、別の意味もある。これは、見る人間、つまりビドルボームの認識と無関係ではないのかもしれない。

これらの騒がしい若者の中の一人の女の子がビドルボームに声をかける、「ねえ、ビドルボームさん、髪をとかしなさいよ、目に入りそうよ」(9)。しかし、ビドルボームは「髪のない」('bald')。彼女が、ビドルボームにこのようなことを言ったのは、彼の「神経質で、小さな手が、ふさふさして、もつれた髪を掻き上げているかのように、髪のない白い額のあたりを忙しなくさわっていた」からであるが——彼の「神経質で、小さな手」は「太った」体と対照的であり、彼の内面や存在そのものと直結しているかのようなようである——「まだ40歳なのに65歳に見えた」(13)ほど老けて見えるビドルボームに向かって若者がからかいの言葉をかける点から、この町における、彼の周囲の人間の彼に対する認識を表しているようである。彼は、外見に相応の敬意を払われてはいないのである。

彼が、初めて読者に紹介される場面で額のあたりをさわっているのは、彼についての何らかの情報を伝えるためでもあろう。一般に額は「英知」の象徴<sup>11)</sup>であるが、ここでは、「懲罰の烙印を押される場所、たとえば、…罪人や奴隷に押された烙印」<sup>12)</sup>の意味であろう。彼には好ましくない過去があり、その記憶を抑圧しようとしているのだろう。このような状態——「いつも、ほんやりとした精神的な一連の疑念に恐れを感じ、悩み」(9)——で、彼はこの町に20年間住んできたから、彼は「自分がこの町のいかなる点においても、自分がこの町の住人の一人であると思ったことはな

かった」(9)。

それでも、たった一人、ビドルボームに近づいた人間がいた。それは、「新ウィラード旅館の経営者トム・ウィラード (Tom Willard) の息子である、ジョージ・ウィラード」(9)であった。ジョージ・ウィラードを紹介するのに、父親の職業まで記し、その男の「息子」と書いているのは、ジョージ・ウィラードが、新聞記者として働いてはいるが、まだ自立していない、未熟な青年であることを暗示するためであろう<sup>13)</sup>。ところで、ジョージ・ウィラードは何故ビドルボームに近づいたのか、また、ジョージ・ウィラードは何故ビドルボームに受け入れられたのか。まず、前者の疑問についてだが、この答えは、後の章の「母親」(“Mother”)の中でジョージ・ウィラード自らの口から語られる、「…僕は、この町を出て、人間を眺め、考えたいだけなんだ」(上点は筆者による)(21)と。ジョージ・ウィラードは人間に興味があって、様々な人との出会いを自ら求めているのだ。そして、彼はビドルボームに対して「尊敬」(“respect”)(10)さえ、感じるようになっていった。その一方で、後者の問題は、ビドルボームのジョージ・ウィラードに対する接し方、彼に語ることから察しがつく。

…彼はジョージ・ウィラードに向かって、大きな声で語った、そして彼が周囲の人間に影響を受けすぎる傾向を非難した。「きみは、自分自身を滅ぼしつつあるぞ」と彼は大きな声で言った。「きみは、一人になって夢を見る性質をもっているが、夢を見ることを恐れている。きみは、この町の他の人間のようになりたがっている。きみは、町の連中の話を聞き、彼らの真似をしようとしている。」…「きみは夢を見始めなければならない。これからは、様々な騒々しい人間の声には耳を閉ざさなければいけない。」(11)

ビドルボームは、ジョージ・ウィラードに、この町の他の人間にない可能性を見出している。彼は、「夢を見ること」をジョージ・ウィラードに求めている。それは、ビドルボームが、昔、ペンシルヴァニアで教師をしていた頃、生徒に求めていたことだった。それが、ジョージ・ウィラードには可能であるという感触を感じ取っているのである。彼が教師をしていた頃、「彼の手でさすられると、疑いや不信が男子生徒の心から抜け出し、

彼らは夢を見始めるのだった」(12)という。「夢を見ること」の大切さを彼は自分より若い者に伝えたいという思いがあったようである。語り手はさらに言う、ビドルボームは「生まれながらにして若い生徒を教える教師になるべく人間だった」(12)と、しかも、「彼は学校の男子生徒からおおいに慕われていた」(12)と。

しかし、生徒と語りながら手でさすするという、彼の行為が、彼には全く予期せぬ結果を招くことになってしまった。語り手は、この予期せぬ結果を「悲劇」(‘the tragedy’)と呼んでいる。この悲劇が、ビドルボームを生徒から慕われる教師から、今のように「おびえて」暮らす孤独な人間に変えてしまった。その出来事は確かに「悲劇」である。ペンシルヴァニアで教師をしていたとき、ビドルボームはアドルフ・マイヤーズ(Adolf Myers)という本名で職に就いていた。この名前に語り手がわざわざ「もっと耳障りな」(‘less euphonic’)という形容詞を付けていることは、彼の身に後に起こる事件——他の人間から疎まれる(彼の場合は実際にはリンチにあって町を追い出される)——を暗示しているかのようである。

ところで、ここで疑問に思うのは、彼の、手でさすという行為は、彼の同性愛者としての性欲から行われているのだろうか、ということである。彼は同性愛者なのだろうか。ビドルボームとジョージ・ウィラードとの間に成り立っている関係を、語り手が「友情のようなもの」(‘something like a friendship’)(9)と表現していることについて、西川氏は、「Anderson は、はじめ“he had formed a friendship”と書き、あとで、“something like”を付け加えたそうであるが、それは、Biddlebaum の George Willard に対する気持ちに同性愛に近いものがあるところから、一般読者のことを考慮に入れ、露骨を避けてやわらげた表現をとったものと考えられる」(85-86)<sup>14)</sup>と述べていて、同性愛に近いものをビドルボームが抱いていたことを前提にこの作品を読んでいる。確かに、ビドルボームと他の人間との関わりを読み直すと、教師時代の彼について、語り手は、

…彼は学校の男子生徒(‘the boys’)におおいに慕われていた。(12)

彼は愛すべき弱さとして見なされるほど優しく穏やかな力をもった、稀な、ほとんど理解されない人々の一人であった。こういう

男の人達が自分の担任する男子生徒 ('the boys') に対して抱く感情の点で、彼ら男の人たちは、男性を愛するときの、もっと繊細な女性たちに似ていないこともない。(12)

学校の男子生徒たち ('the boys') と、アドルフ・マイヤーズは、夕暮れ時に一緒に散歩をしたり、校舎の入口の石段に腰を下ろして夕暮れ時まで一種の夢に没頭して話をしたりした。彼の手はあちらこちらへと動き回り、男子生徒たち ('the boys') の肩をさすったり、乱れた髪の毛をさわったりした。(12)

さらに、ジョージ・ウィラードと一緒に居たときの出来事として、

ウイング・ビドルボームは空想から1枚の絵を描いた。その絵の中では、人間は再び一種の牧歌的な黄金時代に暮らしていた。広々とした緑の草原の向こうから、均整のとれた容姿の若者たち ('young men') がやってきた、歩いてくるものもいれば、馬に乗ってくるものもいた。群をなして、その若者たち ('the young men') は一人の老人<sup>15)</sup>の足元に集まってきた、その老人は小さな庭園の木の下に腰をおろして、若者たちに語りかけるのだった。(上点は筆者による)(11)

と書いている。ビドルボームが描いた絵の中に木があるが、木は「人間性を表す。…男根、喜びを表す」と『イメージ・シンボル事典』には書かれていて、ビドルボームが同性愛者である可能性を高めている。しかし、その一方で、同じく同事典は、「木は有機的統一、健康、長命を象徴する。…美、知恵、詩を表す」と、彼が描いた絵の牧歌的な黄金時代との関連を示す意味も挙げており、描かれた木が、彼が同性愛者である可能性を高めるとは限らないことも暗示している。そこで、もう一度、ビドルボームと彼の手についての語り手の記述を見直してみる。

ウイング・ビドルボームは自分の両手をおおいに使って語るのであった。彼のほっそりした、表情豊かな指は、常に動き回り、

常にポケットの中や彼の背後に隠れようとしているのだが、その指が出てきて、彼の表現の機械のピストン運動棒になった。(上点は筆者による) (10)

「太っている」(‘fat’)(9)彼の指が、「ほっそりとして」(‘slender’)いて「表情豊かな」(‘expressive’)のは、意味ありげである。語り手の、この説明は、ビドルボームという人間の内面、人柄を暗示しているかのようである。彼と手に関する記述はまだある。

ウイング・ビドルボームの物語は、手の物語である。その手が落ち着かずに動き回ること、それは、閉じ込められた鳥の翼がばたつくのと同じようであったが、その動きが彼にその名を授けていたのであった。…その手は、手の主をおびえさせた。彼は自分の手を隠しておきたがったり、…他の人間たちの静かで、無表情な手を驚きの目で見つめたりした。

ジョージ・ウィラードと話をするときには、ウイング・ビドルボームは拳を握り、その拳でテーブルや家の壁をコンコンと叩いた。そうしていると、彼は気が楽になるのであった。二人が草原を歩いているときに話したいという欲望がわいてくると彼は切り株や垣根の一番上の板を見つけ出し、両手で忙しなく叩いて新たな落ち着きを得て話をした。(上点は筆者による) (10)

この記述を見る限り、手が動き回することは当然のことであって、ビドルボームには他の人々の「物静かで、無表情な手」は驚きの感情を抱かせるものであった。特に話をするときには手が動くのはもっと当然なことだったようだ。まさに、彼は「自分の両手をおおいに使って語るのであった」。さらに、彼の手の動きが「閉じ込められた鳥の翼がばたつくのと同じようであった」という記述から、閉じ込められた鳥が翼をばたつかせるのは自由になりたいからであって、ビドルボームの心の中には表現したい、伝えたいことが何かあるということを暗示している。実際、彼が語るとき彼の手は動き回り、彼は雄弁になる。

ある夏の午後、…ウイング・ビドルボームは靈感を受けた人のように語っていた。柵のところで、彼は…柵の一番上の板を巨大なキツツキのように叩きながら、彼はジョージ・ウィラードに大きな声で話しかけ、彼の周囲の人々に影響され過ぎる傾向を非難した。…

…

ウイング・ビドルボームはすっかり靈感を受けたようになっていた。この時ばかりは、彼は手のことを忘れた。ゆっくりと、両手が姿を現し、ジョージ・ウィラードの両肩に達した。何か新しく、大胆なものが、話す声にこもっていた。…「夢を見始めるのだ。これからは、君は騒々しい人々の声に耳を閉ざさなければいけない。」

話すのをやめて、ウイング・ビドルボームは長い時間、じっと、ジョージ・ウィラードを見つめた。彼の目は輝いていた。再び、彼は両手を挙げて、少年('the boy')の肩をさすり始めた。すると、恐怖におののく表情が彼の顔にさっと現れた。

痙攣するかのようには体を動かして、ウイング・ビドルボームはさっと立ち上がり、両手をズボンのポケットに深く突っ込んだ。彼の目には涙が出てきた。「私は家に帰らなければいけない。これ以上君と話すことはできない。」と、彼は神経質に苛立って言った。

振り返ることなく、その老人は丘を駆け下り、草地を横切って行った…(上点は筆者による)(10-11)

ここで、ビドルボームがジョージ・ウィラードの肩をさするとき、ジョージ・ウィラードを「少年」('the boy')と表現している点が興味深い。ビドルボームが肩や髪をさするとき、その相手は「少年」(または「男子生徒」、いずれも原文は('the boy(s)'))と表現される。ビドルボームが、何かを語り伝えたいと思う相手は'boy(s)'なのである。しかし、彼は苺摘みをするため以外には、手を表に出してはいけない、つまり、語りかけてはいけないという強迫観念に取りつかれている。それは、かつて、ペンシルヴァニアでの悲劇の際に、「お前の手で他人に触れるな」(13)と罵倒されたからである。彼は、「自分の手が非難されなければならぬと感じてはいた」(13)



が、「何が起こったのかは理解していなかった」(13)、つまり、あの悲劇(リンチ)が何故起こったのかは理解していなかった。彼には、男子生徒の「肩や髪をさすること(‘the stroking’)は、幼い子供たちの心に夢を入り込ませようとする、この教師の努力のひとつだった」(上点は筆者による)(12)。確かに、広い意味では、彼が何かを語り伝えたいと思った対象が少年(たち)に限られていたことは、彼が同性愛者的な傾向をもっていたことを意味するのだろう。しかし、彼にとって少年たちは恋愛の対象ではなかったのではないか。彼が描いた空想画の老人は、註15)に挙げたように、アリストテレスかプラトンだったかもしれないが、究極的には、その老人に、ビドルボーム本人の姿を見ていたのではないかと思われるのである。あの空想画は、彼が望む、若者に語り伝えたいという望みを描いたものなのではないか。だから、語り手は、ビドルボーム、いや、正確にはアドルフ・マイヤーズは「生まれながらにして若い生徒を教える教師になるべく人間だった」(12)と言うのではないか。

しかし、彼の「努力」は、20世紀初頭のアメリカでは絶対に許されない行為と誤解されてしまった。アドルフ・マイヤーズが担任していた生徒たちの親のひとりである酒場の主人が言っている、「俺の息子(‘my boy’)に手を触れるとどうなるかを教えてやる、けだもの(‘you beast’)め」(上点は筆者による)(12)。マイヤーズの行為が如何に卑劣なものを受け取られたかがわかる。彼がペンシルヴァニアから追い出された晩は、「雨が降っていた」(12)。雨は「刑罰」を表す<sup>16)</sup>。これは、マイヤーズの行為に対する町の間人たちの認識を暗示するものであろう。

だが、当の本人には、自分がそんな罰を受けるようなことをしたという意識はなかった。彼が「暗闇」(‘the darkness’)(12, 13)の中に姿を消したのは、実際に、ペンシルヴァニアから追い出されたのが夜だったということと同時に、彼の、それ以後の人生が暗闇の中を彷徨う、つまり、自分がリンチにあったことに合点がいかにぬま、迷い続けて、ただ「手を人の前に出してはいけない」という強迫観念に取りつかれて暮らすことになることを暗示している。おそらく、マイヤーズ(ビドルボーム)は本当の意味での同性愛者ではなかったのだろうと推測される。一般に、そういう人達は自分が他の人間と異なっていることに思春期に気づくものであろう。しかし、彼には、そういう意識はないように思われる。彼が感じていること

は、自分の手が自分の身に災いをもたらすものであるらしい、ということだけである。その意識は相当強い。ジョージ・ウィラードの肩をさすっているときに、我に返り、してはならないことをしてしまったという思いの強さは、彼が自分の「両手をズボンのポケットに深く突っ込んだ」(上点は筆者による)(11)という記述からわかる。

おそらく、語り手も、ビドルボームを本当の同性者とは想定していないであろう。だからこそ、彼は「生まれながらにして若い生徒を教える教師になるべく人間だった」(12)と言うのであろう。それに、物語の最後の部分で、語り手は、ジョージ・ウィラード少年('the boy')は「彼 [=ビドルボーム] の人間('man')に対する愛を表すための媒体であった」([ ]内の補足、及び上点は筆者による)(13)と明言している。ビドルボームがジョージ・ウィラードの肩をさすりながら語っていると突然、目に涙を浮かべて、走り去ってしまっても、自分の肩をさすられたことにジョージ・ウィラードは別段不審な感情はもっていない。彼は自分がいきなり取り残されたことに、「困惑し」('perplexed')、「怖くなった」('frightened')(11)だけであった。語り手は、ペンシルヴァニアでの悲劇の発端となった、ありもしない、夢で見たことを話した少年を「馬鹿な」('half-witted')(12)と形容しているし、その少年の唇を「しまりのない」('loose-hung')(12)ものと説明している。マイヤーズ(ビドルボーム)の身に起こった悲劇は、そんな「馬鹿な」少年が勝手に「想像した」('imagined')(12)ことが真実と誤解されたことから起きた。

ビドルボームが愛したいのは「人間」('man')であって、その愛を表現するためには手を使うことが彼にとっては不可欠だったのだ。しかし、その手で他人に触れてはならない、と言われたことが、彼の人を愛する感情をも抑圧して暮らさなければならない結果を招いた。Kim Townsend が、「ウィング・ビドルボームは、醜いのではなく、内面的にも外見的にも歪なのである」(204)<sup>17)</sup>と言っているのはこのことであろう。ビドルボームは太っていて、背が低く、髪の毛がない、それは外見の歪さであり、人を愛したいがそれには手の動きが必要である、ところがそれは過去の事件の際に許されない行為となったため、彼は人を愛したくても愛することができなくなった、これが彼の内面の歪さであろう。

夜の帳がおりると、彼は夕食に蜂蜜を塗ったパンを食べた。蜂蜜は、「名誉、

貞節、純潔、愛」を表し、パンは「隠者のつましい食べ物、孤独を表す」<sup>18)</sup>。「太陽の姿が見えなくなり」、「道は灰色の影の中に消えた」。「その日の苺の収穫を摘んだ夜間急行列車が通過すると町は静かになり」、事実上、一日は終わる。「暗闇の中で、彼の手は見えなくなり、それらは静かになった」。ビドルボームの人間を愛したい、人間に語りたいたいという強い感情はひとたびおさまるようだ。世の中を闇が覆うと、普通の人間の暮らしは終わり、彼らグロテスクな人達の時間になる。昼の日中では、「歪な」ビドルボームも、「ランプ」(13)<sup>19)</sup>の光に照らされて、語り手には異なる人間のように見えるという。「きれいに洗われた床」(13)は彼の神経質さを暗示するが、その、きれいな床に白いパンくずが幾つも落ちているのを見つけると、

…彼はそのパンくずを拾い始め、信じられないほどの速さでひとつずつ口に運んだ。テーブルの下、強い光が当たる範囲の中で、その跪く姿は教会のお勤めに没頭する牧師のように見えた。神経質で、表情豊かな指は、光の中に消えたりぱっと姿を現したりして、ロザリオを忙しく指で繰る信者と間違われてもおかしくなかった。

(13)

「お前の手で他人に触れるな」(13)とペンシルヴァニアで罵倒され、その強迫観念に取りつかれ、手を使うことを自ら禁じてきたビドルボームの、この20年間のワインズバーグでの暮らしは、手が使えないために、人と語り、人を愛することの出来ない禁欲的なものであった。実際には、普通に人と語り、人を愛してよい、世俗社会の一般人のひとりであるビドルボームの、その禁欲的な暮らしは、語り手には牧師の暮らしに匹敵するものに見えるのである。それは、ビドルボームを賞賛しているのではない。彼の、この20年間の暮らしの、辛さに、同情を示しているのである。自分の手で他人に触れてはならぬ、という強迫観念——それがビドルボームにとっての真理——はまさしく、彼がそれを手にしたときから「誤り」(‘the falsehood’)(7)になったのである。

## 2. 「紙礫」

この物語は少し変わっている。主人公の老医師は、「彼は…」(‘He’)、「彼は…」という代名詞で読者に紹介され、物語が始まって3段落目になってやっとリーフィ (Reefy) という名を明示される。彼と結婚して、短い結婚生活を送った妻は、その名前すら紹介されないまま終わる。老医師の名前がすぐに紹介されないのは、この物語が一種の昔話のようなものとして語られているからであろう。(リーフィ医師は後の「死」(“Death”)という物語にも出てきて、ここでジョージ・ウィラードと出会う。この時のジョージ・ウィラードは18歳で(128)、彼の母エリザベス・ウィラードが彼の診療所を訪れていたのが、ジョージ・ウィラードが12歳か14歳の時(123)とあり、リーフィ医師が結婚した若い妻にエリザベス・ウィラードのことを話しているので、実際には昔話というのとは的確な表現ではないが。)

物語は漠然としているが、老医師の人柄を暗示する情報は冒頭から与えられる。彼は、「白いあごひげを生やし、大きな鼻をして、手の大きな老人だった。…彼は医者をしていて、ワインズバーグの町中の家々を白い、疲れ果てた馬を駆ってまわっていた」(13)。あごひげ(‘beard’)は、「知恵、経験」<sup>20)</sup>を暗示し、白い馬も「知恵、理性」<sup>21)</sup>を暗示するので、その白い馬を駆って町のなかをまわっている彼に町の人々がある程度の敬意を払っていたらしいことがわかる。彼の鼻が大きいことは、彼が「詮索 [穿鑿ではない] 好き」([ ] 内は筆者による補足)<sup>22)</sup>——細かく調べ、考えることが好きな性格——で、「無邪気、素直で悪意がないこと、偽りや作為がないこと」<sup>23)</sup>ことを暗示し、彼の大きな手は「力、保護」<sup>24)</sup>の象徴なので、彼が包容力のある人間であることを暗示していると考えてよからう。その手は関節がなみはずれて大きい(‘extraordinarily large’)という記述から、彼の手が不格好であったことは容易に推測される。彼は「背が高く、ぎこちない」(123)と語り手言うが、それは、ワインズバーグの「ごつごつとして、歪なリンゴ」(14)と同じで、彼の包容力の大きさ、人間的な魅力はまさに、語り手が言う「美味しい」(‘delicious’)(14)という「甘さ」(‘sweetness’)(14)のことを言っている。リーフィ医師のこの大きな包容力と人間的な魅力に惹きつけられ、両親を失って莫大な遺産を相続した若い女性は彼と結婚することになる。この物語のグロテスクな人間、リーフィ

医師は見た目と内面の乖離が著しい。

しかし、リーフィ医師以外の人間、つまり、彼が結婚した若い女性に求婚してきた多くの男性たちの中から残った二人は、ほとんどひねりのない、語り手が与えてくれる描写が暗示する通りの人間と考えてよさそうである。まず、彼女が最初に結婚を考えた宝石商の息子であるが、宝石商の息子であるということが、彼が表面を飾る人間らしいことを暗示する。彼は「白い手」(‘white hands’)をしていて、始終「純潔」について話をした(15)。その彼は始終純潔について語るが、彼女が、彼の内面には「他の誰よりも強い肉欲」(15)があるという印象を受けたのはおそらく正しいだろう。彼の手の白さは「暖かさのない愛、冷たい愛」<sup>25)</sup>を暗示すると考えてよかろう。この青年と結婚しても幸せにはなれないと彼女は判断したのであろう。もうひとりのまったく口をきかない青年は、「黒い髪」(‘black-haired’)をしており、「いつも彼女を暗闇に連れ込んで、彼女にキスをし始めた」(15)。この記述から、彼もまた強い肉欲の持ち主であることがわかる。それでも、彼女がこの青年を選んだのは、彼が表面をとり作らない性格だと思ったからであろう。しかし、彼も変わった性質の青年で、彼女を妊娠させ、彼女に「恐怖」(‘frightened’)(15)を感じさせた。この青年は、「興奮の瞬間に、実際に、彼女の肩に噛みつき、彼の歯の形が何日も消えなかった」(15)からである。彼のこのような行動は、彼女に対する一種の征服欲の現れであろうか。語り手は、この青年が「大きな耳をしている」(‘with large ears’)と描写していることには何らかの意味があるはずだ。耳は、たいてい、「詮索好き、おしゃべりと助言、立ち聞き」などの象徴であるが、彼は自分から何も語らないので、彼の場合は「世辞や眩惑による誘惑」の象徴<sup>26)</sup>であろう。彼は、内面に強い肉欲を秘めながらも、自分から何も語らず、その分、相手からの求愛が欲しかったのだろう。しかし、それが得られなかったので、「彼女の肩に噛みついた」。肩は「慰める能力」の象徴であり、歯は「力」の象徴<sup>27)</sup>だから、青年が彼女の肩に噛みついたのは、慰めとしての彼女の存在を征服したいという欲望の現れと考えられる。彼の、この行為に恐怖を感じて、彼女はリーフィ医師のもとを訪れた。医師は、「彼女が何も言わなくても、彼女の身に何が起こったのかを察したようであった」(15)。先に来ていた患者の治療が終わると、リーフィ医師は「微笑んで、『田舎へドライブについていってあげよう』と言った」(15)。彼女にして

みれば、本当の優しさに接して、救われた思いがしたのであろう。そして、二人は結婚した。しかし、その結婚生活は、彼女の死によって、長くは続かなかった。

それでも、結婚してから、リーフィ医師は彼女に自分の構築した真理を幾つも話して聞かせた。この、自分なりの真理を構築しては壊し、また新しい真理を構築するという行為がリーフィ医師をグロテスクたらしめる要素である。彼が自分の構築した真理を読み聞かせたのは、短い結婚生活を共にした妻だけであった。彼女は、彼にとって特別な存在だったのだろう。ほんの短い期間でも、本音を語り、幸せな時間を過ごしたリーフィは、ある意味において、他のワインズバーグのグロテスクな者たちとは少し異なっている。彼にはジョン・スパニアード (John Spaniard) という名の友人もいる。リーフィがスパニアードを「どうしようもない、老いぼれセンチメンタリストめ」と身を震わせて笑いながら罵倒するのは、人間の生き死に立ち向かっている自分と、苗木園を経営して木を育てている感傷的な (sentimental) スパニアードの違いを浮き立たせる役目を果たしているのだろうが、それはリーフィがスパニアードを見下していることを意味しているわけではない<sup>28)</sup>。でも、リーフィはスパニアードに自分の構築した真理を聞かせることはなかった。彼は自分の構築した真理を書き綴った紙切れが固まってボールのようになると、それを時折スパニアードに投げつけた。そうでないときは、ポケットから、そのボールのようになった真理を書き綴った紙のボールを「床に投げ捨てた」(14)。彼にとって、自分が構築した真理は一度完成されてしまえば、たとえどんなにすばらしい真理でも無意味なものになってしまうのだ。つまり、真理を構築することだけに意味があるのである。

彼は医師という職業柄、町の人々から完全に孤立するということはない。だからといって、町の人々と交流しようとしたわけでもない。ある年の8月の暑い日に、診療室の窓を開けようとするが、窓は「蜘蛛の巣に覆われ」('covered with cobwebs')、「堅くくっついていて」('stuck fast') 開かなかった。彼は「一度も窓を開けたことがなかった」(14)。結局、開けることを諦め、「窓のことは忘れてしまった」(14) くらいであるから、彼の町の人間との関係が希薄であったことは明白である。

妻が亡くなり、自分で築いた真理を読み聞かせる相手がいなくなっても、

彼は真理を構築し続け、完成すると、それを壊し、また別の真理を構築しつづけた。その行為をただただ繰り返す彼の姿は、まさしくグロテスクである。

#### 註

- 1) 特に断りのない限り、引用の後の( )内の数字はページを表し、作品からの引用は、*Winseburg, Ohio*. (eds. by Charles E. Modlin and Ray Lewis White. W.W. Norton & Company, 1996) のものである。
- 2) この点について、池田智氏は「記者として誰にでも気軽に近づいて行く役柄」(46) (『アメリカ文学ガイド』、日本アメリカ文学・文化研究所編、荒地出版社、2002.) と簡単な説明に留めている一方、Irving Howe は、「夜になると、…彼らは、おずおずと彼 [ジョージ・ウィラード] に近づく、それは、ほとんど哀願するように、彼に自分たちの苦悩を語るためであり、ことによると、彼の声に健全さを見つけ出そうとするためかもしれない。本能的に、彼らは、ジョージ・ウィラードの精神の新しさを感じ、彼がまだ知識や時間によって無感覚になっていないという事実に望みを見つけているのである。」([ ]内は筆者による補足) (116) (“*Sherwood Anderson’s Winesburg, Ohio*”, 『*The American Novel*』、V.O.A. 編、英潮社、1968.) と説明している。
- 3) 英語の原文の順序に即した和訳。実際には、「オハイオ州ワインズバーグという名の町の近くにある溪谷の縁に建っている、小さな木造の家の、半ば朽ちかけたヴェランダを、一人の太った、背の低い男が神経質そうに行ったり来たりして歩いていた」という意味。
- 4) 小西友七、南出康世、『ジーニアス大英和辞典』、大修館書店、2001。
- 5) アト・ド・フリース著、山下主一郎他訳、『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1991。
- 6) 『ジーニアス大英和辞典』、既出。
- 7) 『イメージ・シンボル事典』、既出。
- 8) Irving Howe, 既出。
- 9) 『イメージ・シンボル事典』、既出。
- 10) 前掲書に同じ。
- 11) 『ジーニアス大英和辞典』、既出。
- 12) 『イメージ・シンボル事典』、既出。
- 13) 「死」 (“Death”) という物語の中で、母親のエリザベス (Elizabeth) は、ジョージ・ウィラードが18歳になったばかりの3月に亡くなっている (128)。「母」 (“Mother”) という物語の中で、父親トム・ウィラードとのやりとりから、この時点で既にジョージ・ウィラードは記者としての仕事に就いているの

で、この「手」の中での彼は、17歳以下の年齢であるということになる。

- 14) 『ワインズバーグ・オハイオ』(西川正身編注、研究社出版、1977.)
- 15) Charles E. Modlin, Ray Lewis White は *Winseburg, Ohio.* において、この老人は、「おそらくソクラテス (Socrates) かプラトン (Plato) であろう」(11) という註をつけている。
- 16) 『イメージ・シンボル事典』、既出。
- 17) Kim Townsend, "The Achievement of *Winesburg.*" 1987. (*Winseburge, Ohio.* W.W. Norton & Norton Company. Originally included in *Sherwood Anderson.* Houghton Mifflin, 1987.)
- 18) 『イメージ・シンボル事典』、既出。
- 19) ここで出てくる、「太陽の光」と「ランプの光」の関係は、ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne:1804-1864) が言う、「太陽の光」と「月の光」の関係のようなものと考えてよかろう。
- 20) 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
- 21) 『イメージ・シンボル事典』、既出。
- 22) 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
- 23) 『イメージ・シンボル事典』、既出。
- 24) 『ジーニアス英和大辞典』、既出。
- 25) 前掲書に同じ。
- 26) 前掲書に同じ。
- 27) 前掲書に同じ。
- 28) 「死」という物語に、スパニードが彼の診療室のフロアのテーブルの上にリンゴを置いている、という記述があり (123)、ここでも二人の友人関係が暗示されている。